

はじめに

あなたは「専業主婦」は社会のお荷物だと思いませんか？

専業主婦の割合が減った今もこのテーマは日本で繰り返し論じられ、その議論が約40年もの間続いています。

実際に、今でも専業主婦に憧れる若い女性もいますし、母親のように家庭を守りたいという人もいます。その一方で、そうした生き方を「甘えている」と批判する女性もいます。その対立の背景には、税制や社会保障の「扶養」という制度設計があります。

ただ、ここで視点を変えてみるとまったく違った風景が見えてきます。

専業主婦は守られているようでも、その「保護」は女性の経済的自立を抑え込み、男性にも「働きつづけねばならない」というプレッシャーを与えています。つまり、こうした制度は、女性だけ

でなく、男性の自由をも奪っていると考えられるのです。

日本における専業主婦という生き方は、個人の選択ではありません。それは、国が積み上げてきた「役割のシステム」です。守るよう縛り、支えるようで制約する。だからこそ、この構造は容易には消えないのです。

この本では、こうした「主婦優遇」の背後で、主婦たちの家庭内の無償労働と、労働市場での搾取がどのように続いてきたのか、当事者の目線で、丁寧にお話ししていきます。

もちろん、これは誰かを責めるための本ではありません。見えない鎖をほどきながら、自由に働くとは何かを一緒に考えたいのです。